館長コラム

学校との連携

守安 收

近年、当館が教育普及に熱心な館だというお声をいただく機会が増えました。とても嬉しい評価です。私どもでは、多様な教育普及活動を実践していますが、その核心的部分を占め、大きな柱と位置付けているのが「学校と美術館の連携事業」です。▼この事業の一環として8月の2日間、当館ホールにおいて「シンポジウム『学校と美術館 アクセシビリティを高める多角的・多面的な活用』」と題して講演や事例発表、共同討議等を行いました。アクセシビリティとは「利用のしやすさ」ということですから、学校サイドも美術館サイドも双方が協力して考えていかなければならない課題です。▼私どもは県下の保幼小中高大、特別支援学校といった学校の先生方と「学校と美術館の連携委員会」を組織しています。その前身からいうとほぼ10年間、教育関係者や教育素材開発に協力いただいた作家さんとともに活動してきたわけで、支えてくださった方々には感謝の言葉しかありません。今回のシンポジウムでは、美術館教育素材「カルチャーゾーン+県美 アートカード100（当館を含むカルチャーゾーン各館の作品を使用）」や岡山芳泉高校が当館の《桃太郎絵巻》を使った活用事例の報告がありました。とりわけ後者は、生徒さんたちが脚本を作り、画中の桃太郎や鬼、猿、犬、雉子らを動かしながら音声を入れて映像化したものです。制作の途中には何度か学芸員との率直なやり取りがあり、高校生が成長する姿を目の当たりにしました。若い感性に触れて楽しかったというのが実感です。そして完成映像は市内の小学校で上演され、彼らの頑張りはみごとな成果を上げたのでした。

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814　岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800　FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://okayama-kenbi.info

交通案内　JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間　9:00―17:00（入館は16:30まで）
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日　月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース118号をお届けします。2018年に開館30周年を迎えるにあたり、今年の12月上旬から4ヶ月間、当館はメンテナンス休館に入ります。毎年開催している「日本伝統工芸展」、「I氏賞受賞作家展」を除くと、2017年度の特別展は今号でご紹介している「良寛展」が最後となります。思わず微笑んでしまうようなエピソードがいくつも残っている良寛の人柄とともに、書の魅力をぜひご堪能下さい。同時開催の「小田宏子展」では、クリスチャンとして信仰のなかで生涯を歩みながら、東洋人の表現ととして、絵画から和紙へと辿り着いた彼女の活動をご紹介します。

ISSN 0916-9466
美術館NEWS 第118号　発行｜2017年10月

118

2017 AUTUMN
美術館NEWS

「美術館の紹介」vol.18

地下展示室に繋がる階段の照明は、四角の対角線が交わる中心に向かって二つの三角の頂点が繋がり、光の流れと緊張感を感じさせるデザインである。シェードの背面から透ける光が、三角の隙間から空間へと柔らかく拡がっている。

岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

書を楽しむ 「慈愛の人 良寛―その生涯と書」展から

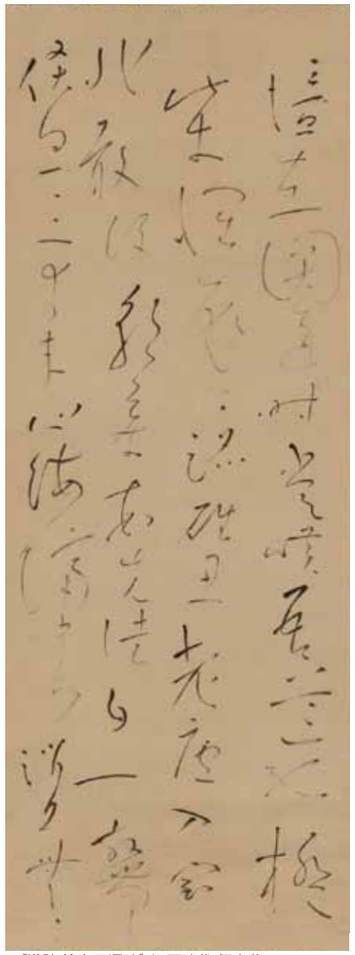
清水 容子（学芸員）

9月29日より、特別展「慈愛の人良寛－その生涯と書」が開催されています。今年の4月から当館に着任した私は、本展がはじめての担当です。日本画を専門分野としてきた私にとって書作品への向き合い方は知らないことばかりでした。この度の展示で、良寛についてよくご存じの方にはもちろん、私と同じように今まで書に馴染みがなかった方にも、その魅力に出会う機会となればうれしく思います。

良寛は清貧の思想を実践し、すぐれた詩歌や書を残した江戸時代の托鉢僧として知られています。越後（新潟県）の出雲崎に生まれた良寛は十八歳で出家した後、巡錫で越後を訪れた備中（岡山県）玉島の円通寺住職・国仙和尚に従って同寺で修行の日々を送ります。三九歳で故郷・越後へ戻りますが、寺を持たず、托鉢僧として晩年まで小さな庵で暮らしました。これだけの説明ですと、まるで人を寄せ付けない厳しく孤高の僧であったように思われますが、実際の良寛は周囲の人たちと交流し、心をかよわせていたことが様々な資料からわかっています。特に幼い子どもたちと一緒に手まりをついたり、野の花摘みやかくれんぼをしたエピソードは有名で、良寛の親しみやすさを強く感じさせます。

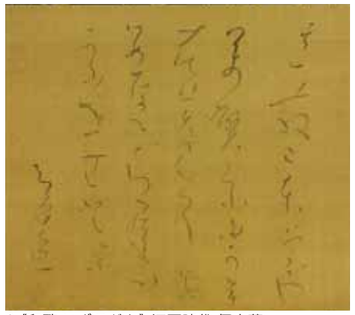
仏道を探求する厳しい姿勢と、子どもたちや友人に向けた温かな眼差しは、本展で見られる良寛の詩歌や書簡から知ることができます。『憶在円通時』という漢詩（図1）は、円通寺での修行を懐古して詠まれています。

憶在圓通時　憶ふ　円通に在りし時
常嘆吾道孤　常に　吾が道の孤なるを嘆ぜしを。
搬柴懐龐公　柴を搬んでは龐公を懐ひ
踏碓思老廬　碓を踏んでは　老廬を思ふ。
入室非敢後　入室　敢て　後るるに非ず
朝参毎先徒　朝参　毎に徒に先んず。
自□一散席　一たび　席を散じてより
倏忽三十年　倏忽たり　三十年。
山海隔中州　山海　中州を隔て
消息無□□　消息無（後缺）


1.《漢詩 憶在円通時》江戸時代 個人蔵

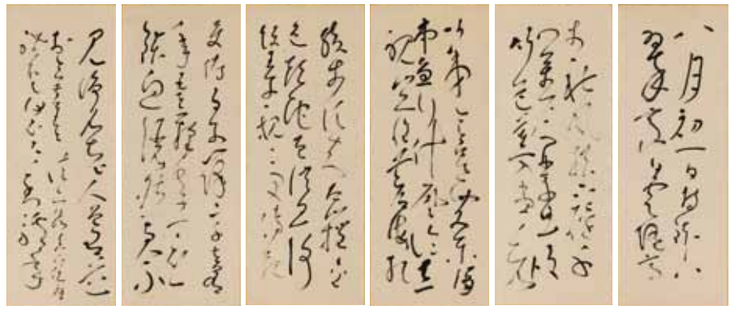
「龐公」や「老廬」といった禅者を思いながら、ただ一人黙々と作務に励み、真実を追い求める姿が漢詩の中から浮かんできます。うって変わって『いざこども…』から始まる和歌（図2）では、良寛が子どもたちを誘って山辺にすみれを見に行こうとしています。

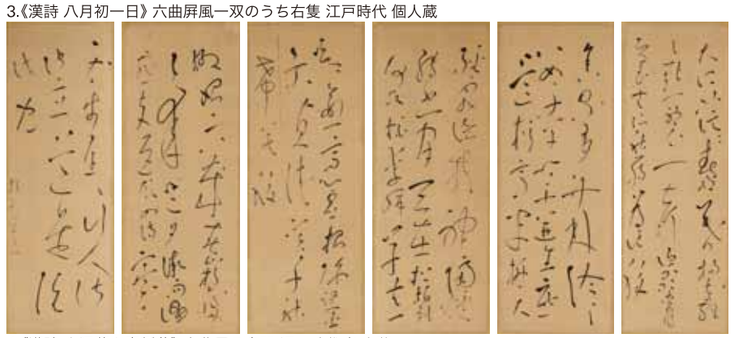
いざ子ども山辺に行かむ菫見に
明日さへ散らばいかにせむとか


2.《和歌 いざこども》江戸時代 個人蔵

ワクワクした気持ちが溢れて、良寛その人がまるで子どものように感じられる歌です。良寛の生涯を様々な書籍から調べていくと、良寛の優しさとその裏にある僧としての孤高の精神、飄々とした自然体の奥にある不屈で強靱な意志が見えてきました。

良寛について深く知るほど人柄や思想に強く惹かれるようになっていましたが、展示の主役である良寛の書そのものに対しては、見ただけでは何が書かれているのか分からないし、となかなか親しみが持てずにいました。そんな中、本展覧会全体の構成をご教示いただいている良寛研究家・小島正芳氏の作品紹介が私の書の見方を変えるきっかけとなりました。小島氏は、良寛の草書に対して「柳葉線で細く線がからみ合い、クルクルと回転を見せながら舞うように書かれている。」であるとか、「川の流れが岩にぶつかっても自然に流れていくように、変化を見せながら滞りなく書かれている。」のように、まるで風景を眺めるような解説をされています。書は文字を読むものだとばかり思っていた私は、風景や絵を表現するような解説は新鮮な驚きでした。書はただの文字ではなく、風景や絵画のように鑑賞しても良いのかと思うと急に身近に感じられます。


3.《漢詩 八月初一日》六曲屏風一双のうち右隻 江戸時代 個人蔵


4.《漢詩 大江茫々春将暮》六曲屏風半双 江戸時代 個人蔵

これまでと意識を変えて書作品と向き合ってみると、今まで気づかなかった面白さが見えてきました。たとえば、六曲の屏風に「八月初一日…」から始まる漢詩（図3）が書かれた作品は、たっぷりと墨を含んだ筆で一文字一文字が大きく書かれ大迫力です。じわりと墨がにじむほどゆっくりとひかれた線は、ずっしりとしていて圧倒されます。所々かすれた線も、軽やかさではなくダイナミックに動いた力強さが伝わります。

もう一つ作品を見てみましょう。同じく六曲の屏風に描かれた漢詩です。「大江茫々春将暮…」から始まる書（図4）は、先に紹介した「八月初一日…」とは変わって、軽やかな筆致が印象的です。スピード感のある線と、リズムをとるような点が入り交じって、音楽を聴くような楽しさがあります。同じ屏風の作品であっても、ずいぶんと違う印象を受け興味深いのですが、さらにゆっくり、じっくりと筆の動きを追ってみましょう。息を止め、グッと力を込めた箇所、一気に腕を動かして素早く書かれた線、息を吐きながら力を抜いて引かれた曲線など、書を書いた良寛の呼吸や動作が生き生きと感じられます。まるで書いている瞬間の手元を見るように作者との距離の近さが感じられる経験は、絵画や彫刻の鑑賞では難しいのではないでしょうか。文字というシンプルな形だからこそ、作者と鑑賞者の距離が縮まり、制作を追体験するような感覚を持つ事ができる。文字が読めなくても、書の鑑賞は面白い、と作品と通して良寛に教えられた気がしました。

私も奥深い良寛の世界の入口がやっと見えてきた所ですので、来館される皆様と一緒に書の楽しさを見つけていきたいと思っています。そして皆様も、ぜひどれか一つ自分の好きな作品をゆっくりじっくり鑑賞してみてください。良寛の姿をすぐそばに感じることができるかもしれません。

【特別展】「慈愛の人 良寛―その生涯と書」
会期：2017年9月29日-11月5日
観覧料：一般1000円、65歳以上800円、大学生500円、高校生以下無料

回顧録：5年前の奈義MOCAにて ―「小田宏子 FRAGMENTS」によせて―

大山 真季（学芸員）

「小田宏子展～共にあるものについて～」（2012年9月29日-10月21日） 奈義町現代美術館 展示風景

私の学芸員生活が始まり半年ほど経った2012年の10月、奈義町現代美術館（奈義MOCA）で開催されていた特別展「小田宏子展～共にあるものについて～」の会場を訪れた。展示室に足を踏み入れると、優しい柔らかさを感じる、角に丸みを帯びた乳白色の四角のピースが整然と、ときには列から1つだけ外れながら、リズムよく壁面全体に配されていた。無数に展示されたこのピースは、表面にぼこぼこと細かな膨らみがあり、同じ表情のピースは一つとしてなく色味もそれぞれ僅かに異なっている。思わず触りたくなる、生命の集合体のような印象を受けるインスタレーションだった。作品に近付いてみると、表面には微細な皺があり紙を素材にした作品であることがわかる。興味深く鑑賞していると、一人の小柄な女性を担当学芸員から紹介された。彼女こそがこの作品《共にあるものについて》の作者である小田宏子（1940-2015）だった。

綿を雁皮紙（がんぴし）で包み、ガンタッカーで打ち止めて膨らみを生み出していること、微妙に異なる色味は雁皮紙そのものの色であること、今回の展覧会のために約500ピース制作したことなど、彼女は自身の作品について丁寧に説明してくれた。奥の空間では、数十個の丸い種型の作品《seed of...》を展示しており、スポットライトの光を中心としてそこから円形に拡がっている。しかし、これまでに会場を訪れた子どもたちが、作品に触れたい願望の赴くまま行動した結果、当初の展示より円が拡がってしまっていたらしい。そのことに彼女は困りつつも笑いながら元の状態に戻した。この展覧会の会期中、会場で過ごすことが多かった彼女は、私に話をしてくれたように、たくさんの人とコミュニケーションを取って空間をともにしたようだ。会期中に開催されたトークイベントでは「何もわからんけどここにいるのが気持ちいいからずっと座っとるんじゃ」と話した80代の方の感想が最高の褒め言葉だと語っていた。子どもたちの素直な反応にも、いくらか嬉しさを感じていたのだろう。作品に触れることは禁止となっていたが、子どもに限らず、来場者から作品に触れてもよいかと直接尋ねられれば、実際に触らせていたという。

現在当館で開催中の特別展示「小田宏子 FRAGMENTS」（2017年9月26日-11月5日）では、作品に触れることは出来ないが、彼女が制作に使用していた雁皮紙の他、楮（こうぞ）や三椏（みつまた）を含む代表的な和紙や原料を触って体験できるコーナーを設置している。作品鑑賞とともにそれぞれの和紙に触れ、揉み紙にしてみたり、裂いてみるなど、紙そのものの表情を楽しみながら素材の魅力を感じて欲しい。

イラストレーター 森本美由紀

石田 すみれ（学芸員）

2016年に当館で回顧展を開催したことをきっかけに、津山の自宅にあるアトリエで大切に保管されていた森本美由紀(1959-2013)の作品をお預かりしている。イラスト原画や資料など膨大な量であったため、一点ずつ数えて写真を撮るだけで幾日も要した。なかなか終わらない作業ではあったが、一箱ずつ進めていくうちに、小さな紙に描かれたカットから大判のイラストまで、時代もスタイルも異なるイラストが次々と現れるため、時間を忘れて没頭できた。ディズニー映画を彷彿とさせるようなポップで可愛らしいキャラクターのイラストや、スパイ映画か探偵小説に出てきそうな格好いい男性のイラストなど、特別展示の際には紹介できなかった画風の作品も多数みられた。他にも、何かのエッセイの挿絵になったのだろう、パリの町並みを描いたと思われるカットもあった。スタイル画とはまた違った趣のある簡素で繊細な線で描かれており、洗練された雰囲気が感じられた。まったく一人の作家が手がけたとは思えない多彩な仕事ぶりである。

作業中には原画ならではの発見もあった。ホワイトで何度も修正した箇所は裏から見ないと確認しにくいものもある。手の角度を何度も描き直したイラストでは、少し大げさな言い方かもしれないが、修正の痕がまるで千手観音のようになっていた。これで完成と思えるまで何度も手直ししたのだろう。描き手の試行錯誤のあとがうかがえた。

多くのイラストがビニール袋に入れられ、ラックに保管されていたが、ファイルにとじて整理されているものもあった。なかでも他よりすこし上質な黒いファイルは特別なもの、おそらく作家のポートフォリオではないかと推測しているのだが、雑誌の切り抜きやコピーが丁寧に納められていた。イラストレーションは、雑誌に掲載された形が完成品だと考えられるので、このポートフォリオに納められたものと、原画を一緒に並べられるのが一番良い展示の仕方ではないかと私は思っている。しかし、掲載された雑誌が絶版になっているものもあり、どこにどのように掲載されていたのか調査が必要だ。反対に完成作のコピーがあっても原画が見当たらないこともある。

まだまだ未調査の部分も多いが、今後も少しずつ展示を進めることで、森本美由紀の魅力溢れるイラストレーションの数々を、皆様にご紹介することができればと考えている。

右：「Spuntino（スプンティーノ）」
2004-2005 コレクション 広告用イラスト
© Miyuki Morimoto / 森本美由紀 作品保存会

新収蔵品紹介

File 09

内田智也の作品
廣瀬 就久(主任学芸員)

2.《Combination Nest#2001》2000年 本館蔵

11月10日から12月10日まで開催する「岡山の美術7期」では、近年所蔵された作品を中心に展示します。宮忠子は2015年度、岡崎信吾、瀬本容子は2016年度の特別展示「岡山の作家☆再発見」シリーズを機に、寄贈のあった作品です。

本稿では、2012年度に寄贈のあった、内田智也の作品を紹介します。

内田智也(1947-2009)は津山市に生まれ、1970年に同志社大学文学部英文学科を卒業しました。1989年に、米国カリフォルニア州バークレーにある、カラ・インスティテュート・オブ・プリンツ[Kala Institute of Prints]のアーティスト・イン・レジデンス(滞在型制作活動)で、版画に向かいます。おもに銅板を用いていて、エッチングやアクアチントを手がけました。2009年にはビトラ国際版画ビエンナーレ(マケドニア)で大賞を取ります。就実短期大学の教授を務めました。

当館には、《Nest》5点と、《Combination Nest》5点があります。《Nest》とは「巣」のことで、《Combination Nest》とは「巣が組み合わさった作品」という意味です。いずれも多数制作しました。

《Nest #7》(エッチング・アクアチント、紙 70.0×50.0cm 1991)[図1]を見ると、細かい線で緻密に描く巣ですが、一部は裂かれています。有刺鉄線が周りに巡ります。巣の内側を見ると、上部には木々のようなものが三層に重なり、中程左には三角錐が数個、その右には建築物がありますが、人間など生命体はありません。現実なのか夢なのか、内界なのか外界なのか、興味が深まるところです。

《Combination Nest#2001》(エッチング・アクアチント、紙 60.0×180.0cm 2000)[図2]は、前年に制作した《Nest#28》《Nest#29》(いずれも60.0×90.0cm)を、横につなげた作品です。連続しても1つの作品として成立しています。巣の上に、片膝を立てた人物がいる、謎めいた風景です。

4人の作家とも新たな顔ぶれです。時間をかけてご観覧ください。

1.《Nest #7》1991年 本館蔵

展覧会スケジュール

9月 September

9月6日|水|—9月17日|日|
第68回岡山県美術展覧会

9月29日|金| 13:30〜15:00
記念講演会 「良寛の生涯と書」
講師 小島正芳(良寛研究家・全国良寛会副会長)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

10月 October

9月26日|火|—11月5日|日|
【岡山の美術展】
小田宏子 FRAGMENTS

10月9日|月・祝| 14:00〜15:30
記念講演会 「紙と現代美術」
講師 建畠哲(埼玉県立近代美術館館長・多摩美術大学学長)
会場 講義室(先着70名) ※無料

9月29日|金|—11月5日|日|
【特別展】
慈愛の人 良寛—その生涯と書

良寛(1758-1831)は詩歌・書に優れた托鉢僧で、越後(新潟県)出雲崎生まれ。同地を訪れた備中(岡山県)玉島円通寺の国仙和尚に従って同寺に入り、十年余りの修行ののち諸国を行脚して帰郷。生涯寺を持たず、名利にとらわれぬ生活を送り、清貧の中ですべての生けるものへの愛を失わず、子どもと戯れ、友と語り、和歌を、漢詩を詠み、書に興じた人でした。本展では日本有数の良寛コレクター秘蔵の作品を中心としておよそ150点からその魅力に迫ります。

11月 November

10月22日|日| 14:00〜15:30
トーク 「中原浩大アーティストトーク」
講師 中原浩大(美術家)
会場 講義室(先着70名) ※無料

11月10日|金|—12月10日|日|
【岡山の美術展】
第7回I氏賞受賞作家展
高松明日香・原彰子

12月 December

11月16日|木|—12月3日|日|
第64回日本伝統工芸展岡山展

展覧会関連事業ほか、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催。詳しくは当館HPまで。
http://okayama-kenbi.info/

12月11日|月|—2018年4月19日|木|
※メンテナンス休館